平成 30 年度　第２回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会　議事概要

１　日時及び場所

日時：平成 30 年３月８日（金）　９時 30 分から 11 時 30 分

場所：道庁別館西棟　４階　会議室６

２　出席者

＜構成員：５名＞

熊木俊朗　東京大学大学院人文社会系研究科教授（座長に選出）

瀬川拓郎　札幌大学教授

高瀬克範　北海道大学大学院文学研究科准教授

天野哲也　北海道大学総合博物館研究員

澤井　玄　北海学園大学非常勤講師

＜公益財団法人北海道埋蔵文化財センター：１名＞

坂本尚史　普及活用課主査

＜北海道教育委員会：４名＞

小松文化財・博物館課長

西脇文化財調査グループ主幹　ほか

＜傍聴者：１名＞

３　意見交換

＜擦文文化の集落について＞

瀬川氏が、「擦文文化の集落について」と題して話題提供を行った。

・擦文文化の集落が例外なく舟の運航可能な河川等に面しているのは、洗練された丸木舟運航システムによる河川交通の確立と関係すると考えられる。

・擦文文化期に住居の数が爆発的に増大する一方で、墓が見つからないのは、住居が風葬の施設として使われたからではないか。縄文からの伝統である上屋を設けた殯葬が、変容しながらサハリンや千島で近世まで残存した可能性がある。

＜平成 30 年度重要遺跡確認調査の成果について＞

公益財団北海道埋蔵文化財センターが、今年度実施した湧別町川西２遺跡の調査成果について説明した。

・102 箇所の竪穴を確認した。センサイ川によって形成された段丘崖に沿って、南北約 250ｍ、東西約 50ｍの範囲に細長く分布する。遺跡の保存状態は概ね良好である。

・竪穴の形状は円形 40 軒、多角形 21 軒、方形 41 軒で、各形状の比率に著しい偏りはみられない。長期にわたって断続的に集落が形成された複合遺跡と捉えられる。

・今後の課題として、地表から確認できる竪穴の形状と構築時期の対応関係、竪穴の内容等を確認するため発掘調査を実施したい。川西地区３つの竪穴群遺跡の変遷を通して、長期間にわたる川西の地の利用状況を明らかにしていきたい。

＜北海道東部の竪穴住居跡群調査第２次調査計画（総合調査）について＞

事務局が、第２次調査計画で実施する総合調査の方針等について説明した。

・第２時調査計画では、主に太平洋岸東部の根室・釧路・十勝管内を対象としてデータベースを作成する。根室管内は全道の竪穴群の約３割、釧路管内は約２割を占め、十勝管内は道史跡の竪穴群が点在する地域である。

・データベース作成によって、かつていくつの竪穴が存在し、現在いくつの竪穴が残っているのか、また、いつの時点まで状況が確認されているのかをより詳細に把握し、今後の竪穴群の保護に必要なこと明確にしたいと考えている。

＜構成員の主な発言＞

擦文文化の集落について

「擦文文化の葬制が住居内での風葬であったとしたら、住居の床面に何らかの痕跡は残るのではないか」

「焼失住居や廃屋時の儀礼的行為を見直すと、葬送に関しても色々なことが見えてくるかもしれない」

「住居の正確な年代や使用期間が分かれば、擦文文化の墓制の実態解明の手がかりになるだろう」

平成 30 年度重要遺跡確認調査の成果について

「川西２遺跡南エリアの擦文文化とみられる竪穴の状況をみると、オホーツク文化の竪穴が再利用された可能性が考えられないか。竪穴の再利用のようなことを繰り返しているうちに、いくつもの竪穴ができ、いつしかモニュメント的なものになっていく、というようなこともあるのではないか」

「大規模竪穴群を残した人々は、なぜその地に執着したのだろうか。集団内の紐帯や土地の特性等もふまえ、竪穴群の形成理由を検討することは、本調査の重要な課題と思われる」

第２次調査計画（総合調査）について

「竪穴群の適切な保護のためには、現在の土地の使われ方や、自然の影響（植生・河川による浸食の有無など）の現地のいまの情報を得る必要があるだろう」

「現状の把握を進める上で、地元の埋蔵文化財専門職員等との連携が不可欠である」